



平安だより

世田谷平安教会付属 平安幼稚園

2018年 12月号

「十字架と復活の主のクリスマス」

牧師・園長 長村亮介

「クリスマスの夜」

わたしはマントにくるまって
冬の夜の郊外の空気に身内を洗い
今日生まれたという人の事を心に描いて
思わず胸を張ってみぶるいした

——彼の誕生を喜び感謝する者がここにも居る
彼こそは根源の力、万軍の後楯
彼はきびしいが又やさしい

しのめの様な女性のほのかな心が匂い
およそ男らしい気稟がそびえる
此世で一番大切なものを一番むきに求めた人
人間の弱さを知り抜いていた人
人間の強くなり得る道を知っていた人
彼は自分のからだでその道を示した

天の火、彼

——彼の言葉は痛いところに皆触れる
けれども人に寛闊な自由と天真とを得させる
おのれを損ねずに伸びさせる
彼は今でもそこらに居るが
いつでもまぶしい程初めてだ

——多くの誘惑にあいながら私も
おのれの性来を洗って来た
今彼を思うのは力である
この土性骨を太らせよう
飽くまで泥にまみれた道に立とう
今でも此世には十字架が待っている
それを避けるものは死ぬ
わたしも行こう
彼の誕生を喜び感謝するものがここにも居る

暗の夜路を出はざれると、
ぱっと明るい灯がさしてもう停車場
急に陽気な町のさわめきが四方に起り
家へ帰ってねる事を考えている無邪気な人達の中へ
勢のいい電車がお伽噺の国からいち早く割り込んで来た
(高村光太郎)

高村光太郎はクリスチャンではありませんでしたが、この詩を読むと、キリスト教について深い理解を持っていたのではないかと思えます。彼は『美と真実の生活』の中で、「キリスト自身のいうことは皆うけ入れられぬことではないが、伝説のところにくるとひっかかってどうしても入れない」と述べています。「伝説のところ」と言うのは「奇跡」のことでしょうか。確かに神さまの奇跡があるなら、どうしてこのようなことがあつて良いのかと思う時があるのは、私も同じです。しかし私は敢えて言いたい。それはこの詩の中に「今でも此世には十字架が待っている／それを避けるものは死ぬ」とあるように、私たちはそれぞれに弱さや欠け、そして罪ある者で在りながら、重い荷を担い困難な時を過ごさなければならぬ存在であるからです。そういう時、神さまの奇跡を求める願いは、本当に切なるものです。しかし、だからこそ主イエスが私たちの罪の身代わりとして十字架に死んで、その死から復活されるために私たちの世にお生まれになったという出来事が、私たちの生きる力の源になるのではないのでしょうか。彼がこの詩の中で二度も繰り返して「彼の誕生を喜び感謝する者がここにも居る」とあるのは、そのことではなくて何でしょうか。もしイエス・キリストが十字架だけで復活されなかったら、私たちの罪を赦すという十字架は何のためなのでしょう。復活がなくて、私たちは何を希望にして、「此世の十字架」を生きたら良いのでしょうか。

クリスマスとは、私たちの罪を赦すために十字架で死に、その死から復活され、信じる者に、御国に生きる復活の永遠の命を約束された神の御子、イエス・キリストの誕生を喜び、心から感謝する日なのです。Ω